

## 「ライフデザイン」の新規開講を迎えて

|    |     |                    |
|----|-----|--------------------|
| 蝶  | 慎一  | (大学教育基盤センター准教授)    |
| 佐藤 | 慶太  | (大学教育基盤センター准教授)    |
| 三好 | 秀和  | (地域マネジメント研究科教授)    |
| 原  | 瑞穂  | (キャリア支援センター特命准教授)  |
| 岡田 | 徹太郎 | (大学教育基盤センター地域教育部長) |
| 西本 | 佳代  | (大学教育基盤センター准教授)    |
| 西成 | 典久  | (経済学部教授)           |

### 1. 新規開講の「ライフデザイン」という構成科目群

#### 1-1. 「ライフデザイン」の位置づけ

「ライフデザイン」は、「学びの動機付け・方向づけを促す『学び・生き方科目』」のうち、「生き方科目」(1単位以上必修)に新規に設置された「共通教育スタンダードのベースを学ぶ『入門科目』としての性格を有する」特徴的な構成科目群である(寺尾ほか、2022、13-14頁)。2022年度の開講状況は後で詳しく述べるが、「ライフデザイン」は、第3期中期目標期間のカリキュラムにおける「主題A『人生とキャリア』」に相当する「構成科目群の「人生とキャリア」と「主題C『地域理解』の一部」に対応する「地域の学びに関する入門的な要素の強い」構成科目群の「地域と生きる」より構成された新たな科目群である(寺尾ほか、2022、14頁)。まず、「ライフデザイン」の具体的な実施報告にうつる前に、あらためて「ライフデザイン」の科目の定義と、その性格を跡づけておきたい。はじめに、『香川大学教育研究』(第19号)の「新カリキュラムの始動に向けた取り組み」の特集論文(寺尾ほか、2022)に掲載されている「ライフデザイン」の定義と説明の文章である。

「人間は他者とかかわりながら、特定の場所で生きていくほかありません。それゆえ、人生や生活を設計するためには、自分が社会で果たす責任や、実際に生きる地域社会との折り合いについて考える必要があります。本科目(注：ライフデザイン)では、社会において個々人が果たすべき役割について理解を深め、そこから自己や社会の望ましい未来を考えるとともに(「市民としての責任感と倫理観」(d))、地域社会の現状・課題・解決策について学ぶことを通じて、地域の中でいかに生きるべきかを考察します(「地域に関する関心と理解力」(e))。」(寺尾ほか、2022、16-17頁)

続いて、『全学共通科目修学案内(教養教育)2022年度』(香川大学、2022b)を見てみよう。以下の通り、新入生にも容易に理解できるよう、特に簡潔な定義が見て取れる。

「地域で生活する市民としてよりよく生きるための倫理観や責任感を身につける必修科目です。」(香川大学、2022b、5頁)

## 1-2. 2022（令和4）年度「ライフデザイン」科目の実施概要

「ライフデザイン」は、2022年度より新規に開設された科目である（香川大学、2022a、16頁）。表1は、先述した「人生とキャリア」と「地域と生きる」の2つの構成科目群の分類に沿って、各々で開講された各科目の題目名称とその具体的な開講時期（クォーター（1Q、2Q、3Q））について整理したものである。表1を詳しく確認すれば、2022年度は、計18科目開講されている。そのうち、「人生とキャリア」で15科目（約83%）、「地域と生きる」で3科目（約17%）という内訳である。また、開講時期に着目すると、1Qの開講が最も多く14科目（約78%）で、次いで3Qの開講が3科目（約17%）となっている。

表1 2022年度における「ライフデザイン」開講科目一覧

| 題目                         | 期間 | 題目                              | 期間 |
|----------------------------|----|---------------------------------|----|
| <b>人生とキャリア</b>             |    |                                 |    |
| 想像力の教室（2-1.）               | 1Q | キャリアデザインと対人理解                   | 3Q |
| 地方で生きるということを考える            | 1Q | 私たち（主権者）と公共・代表                  | 1Q |
| ライフプランニングから見た金融（2-2.）      | 1Q | 多様なライフ・キャリアを考える<br>一男女共同参画の視点から | 1Q |
| 社会人になるための基礎を学ぶ             | 3Q | D（ダイバーシティ）& I（インクルージョン）入門       | 1Q |
| ワークライフバランスとキャリアデザイン        | 1Q | 学ぶ・働く・生きる                       | 1Q |
| 地域で活躍する職業人に学ぶA（2-3.）       | 1Q | 身近な生活における支援を考える                 | 3Q |
| 地域で活躍する職業人に学ぶB（2-3.）       | 2Q | 人生100年時代の学びと仕事を考える（2-5.）        | 1Q |
| キャリアデザインと自己理解（2-4.）        | 1Q |                                 |    |
| <b>地域と生きる</b>              |    |                                 |    |
| 映像から学ぶ香川の歴史と文化、地域の課題（2-6.） | 1Q | 地域をデザインする思考と実践（2-7.）            | 1Q |
| 地域社会におけるSDGs達成への取り組み       | 1Q |                                 |    |

出典：香川大学（2022a、16頁）、寺尾ほか（2022、14頁）を参照し、筆者作成。

## 1-3. 実施報告の科目紹介、2つの共通教育スタンダードの扱い方という視点

続いて、次項で取り上げる実施報告の7つの科目について、列挙しておきたい。表1より、「人生とキャリア」の構成科目群から「想像力の教室」（2-1.）、「ライフプランニングから見た金融」（2-2.）、「地域で活躍する職業人に学ぶA・B」（2-3.）、「キャリアデザインと自己理解」（2-4.）、「人生100年時代の学びと仕事を考える」（2-5.）を、「地域と生きる」の構成科目群から「映像から学ぶ香川の歴史と文化、地域の課題」（2-6.）、「地域をデザインする思考と実践」（2-7.）を取り上げ、実施報告として掲載している。

これらの実施報告では、各担当教員に対して「授業の概要」(1) 紹介はもとより、香川大学 (n. d. a) で明示されている「共通教育スタンダード『d 市民としての責任感と倫理観』及び『e 地域に関する関心と理解力』」をめぐる「扱い方」(2) という視点を設定し、明確に記述いただいた。これにより、あらためて各担当教員が、『ライフデザイン』はどのような科目であり、二つの共通教育スタンダードがなぜ必要とされるのか、わかりやすい言葉で説明することが求められた」(寺尾ほか、2022、16 頁) それぞれの具体的状況の一端が窺い知れる。あわせて担当授業にかかる「考察、課題、可能性」(3) を踏まえつつ、実施報告を執筆いただいた(詳しい報告内容は、次項を参照)。

(文責：蝶 慎一)

## 2. 実施報告

### 2-1. 「想像力の教室」

#### (1) 授業の概要

この授業の目標は、「想像力」が果たす役割を哲学的に考察することを通じて、「想像力」が関連する諸問題について考え、自分の主張を論証できるようにする、というものである。授業の流れとしては、まず一般的な「想像力」の意味を確認したあとで（第1回）、メディアと想像力をめぐる問題を取り扱う（第2回～第4回）。この部分では「差し当たっては見えていないものに想像力を使ってどう迫っていくか」という問題が軸をなしている。続いて、倫理的規範と地域文化の固有性との葛藤（特に、伝統として是認されている差別的な習慣の問題）を考察する。ここでは、異文化や他者に対する共感だけでは解決しない問題を取り上げて「想像力のみで問題を解決しようとした場合にどのような困難が生じるか」という問題に目を向ける。最後に、これまでの考察を踏まえて、自分の未来について想像する意義について考え、意見をシェアして終わる。

各回の授業は、①教員による事例紹介および解説、②グループでのディスカッション、③関連する個人課題への取組（宿題）、そして、④次回冒頭での教員からのフィードバック、を一つのパッケージとして進める。受講人数は140名であるが、初回到4名グループを35班つくり、以後固定して、グループディスカッションを行う形をとっている。

各回の課題のほかに、①授業で扱ったテーマを深める、②自分で見出した「想像力」に関わる問題を論じる、③歌詞等の解釈を行う、という三つのコースから一つ選択してレポートを書く、という最終課題（文字数1600字程度のレポート）を設定した。

表2 授業の構成

|     | 授業のテーマ                    | 備考      |
|-----|---------------------------|---------|
| 第1回 | オリエンテーション - 「想像力」を養うことの意義 |         |
| 第2回 | 他者と想像力①—メディアと想像力          |         |
| 第3回 | 他者と想像力②—報道とフィクション         | 映画視聴を含む |
| 第4回 | 他者と想像力③—フィクションが私たちにもたらすもの | 映画視聴を含む |
| 第5回 | 社会と想像力①—倫理的規範と想像力         |         |
| 第6回 | 社会と想像力②—倫理的規範と地域文化の固有性    |         |
| 第7回 | 未来を想像することの意義              |         |
| 第8回 | まとめ                       |         |

#### (2) 共通教育スタンダード「d 市民としての責任感と倫理観」及び「e 地域に関する関心と理解力」の扱い方

この授業は2017年から開講しており、今年度で5年目となる。昨年度までは「主題A」という枠で開講しており、この枠に指定されていた共通教育スタンダードは「d 市民としての責任感と倫理観」のみであった。そういうわけで、昨年度までの授業では、「なぜルー

ルがあるのか、ルールをよりよくするにはどうすればよいのか」という問題を考察するという仕方で、「d 市民としての責任感と倫理観」を取り扱っていた。本年度から「e 地域に関する関心と理解力」というスタンダードに準拠する必要が新たに生じたため、社会のルールの問題を地域文化の固有性の問題と絡めて考察する、というパートを組み込んだ（第5～6回）。具体的にいうと、このパートでは、①地元の冠婚葬祭についてのしきたりについて学生に調査、報告を行わせて全体で共有、②「ある社会のルールが別の社会のルールよりも劣っているとか、すぐれているとか、いうことはできない」という主張（いわゆる「倫理における文化的相対主義」の立場）への賛否を問う（1回目の意見聴取）、③「誘拐結婚」（キルギス）、「名誉殺人」（インド）という事例を紹介し、改めて②の問いを投げかける（二回目の意見聴取）、④教員からのフィードバック、という構成で授業を進めた。異文化理解を主題化する場合、寛容な態度や共感の必要性がまず表に出ることがあるが、一方で倫理の問題にも目を配らなければ、当該文化の中で不利益を被っている人たちを素通りしてしまうことにもなりかねない。担当者の専門が哲学・倫理学であるという制約もあるが、このような「地域に関する関心と理解力」へのアプローチも必要であると考えた次第である。

授業後「どの文化も尊重すべきだと思っていたが、見方が変わった」という趣旨の感想がいくつか出されており、一定の範囲内で、学生がより広い視野から地域の問題を考えるきっかけをつくれたのではないかと考えている。関連して、テーマを自由に選択できる最終課題において、12名が文化的相対主義の問題を取り上げていたことを記録しておく。

### (3) 考察、課題、可能性

以下では特に、共通教育スタンダードの扱い方について考察を行いたい。上記のように、今回の対応スタンダードの増加にあたり、私は従来から扱っていたルールをめぐる考察に地域文化の問題を組み込むという形で対応した。それ以外の部分に大きく手を加えることなく改変を行うことができたという利点もあるが、「d 市民としての責任感と倫理観」と「e 地域に関する関心と理解力」を、学生にとって身近な問題との関連で扱うことができたかと言えば疑問が残る。まず学生に地元のしきたりについて調査、報告を課したところまではよかったが、その後紹介した事例が、海外の、それもかなり特異な風習であったために、文化的相対主義の問題が抽象的な考察の対象にとどまってしまったように思われる。改善策としては、考察のフィールドを国内に限定したうえで、そこに差別等の問題はないか精査していくという方法が考えられるが、その場合、まず国内の事例に問題を見出していく、ということの難しさもありそうである。検討を続けたい。

（文責：佐藤慶太）

## 2-2. 「ライフプランニングから見た金融」

### (1) 授業の概要

本授業は、昨年度から開講された「金融とキャリア～銀行、証券は役に立っているか?～」、「金融とキャリア～生命保険、損害保険、信託銀行は役に立っているか?～」を改善し、これらの継続科目として開講した。この変更には3つの理由がある。1つは、日常生活で金融商品になじみのない学生に座学でその有用性を教えても理解は得られても共感が得られないこと。次に、第4期の全学共通教育カリキュラム改革で主題A科目が生き方科目に分類されたこと。最後に2022年4月1日から成人年齢が18歳に引き下げられたことへの対応である。昨年度科目は、金融業の仕事を中心に解説しその仕事内容が市民の人生にどのように役立っているかを問う科目であった。これに対し、今年度は、まず人生ありきでその人生を歩んで行く上で利用される金融商品を解説する形で金融商品の有用性を問うた運営にした。

表3 授業の構成

|    |   |
|----|---|
| 1回 | シラバスに基づいて授業の全体像を説明する。また、ライフプランとは何か。統計データをどう集めるか。家族のセットアップと家計統計について説明する。               |
| 2回 | 収入1 日本人の平均年収、正規と非正規、男女賃金差、最低賃金を知る   |
| 3回 | 収入2 上場企業の年収、君のいきたい会社の年収は? その差の原因は何か?  |
| 4回 | 三大支出1 生活費、いくら日本人は生活費にお金をかけているか? 消費者金融、カード利用の問題点と利用方法。複利を味方につけるか敵に回すか?                 |
| 5回 | 三大支出2 住宅費はいくらかかるか? 賃貸と持ち家論争。住宅ローンにいくらかかるか? 生命保険と損害保険の違いとそれぞれの特性を学んで夢を実現しよう。           |
| 6回 | 三大支出3 老後資金2000万円問題。年金はいくらもらえるのか。  |
| 7回 | 収支予測 キャッシュフロー分析で課題設定しよう。  |
| 8回 | 資産運用 自己責任の時代を生き抜く。退職金、確定拠出年金は実は投資信託での運用です。投資信託のベースは何か。複利を味方にしよう。非課税商品を知ろう。分散投資の意味を知る。 |

各回の授業は、授業外学修としてライフプランに必要な標準的な日本人のデータをMoodleに提出してその中で最適なデータを講師が解説することからはじまる。最適なデータとは雑誌や記事などで作成された2次データは不可、ライフプランは一年単位、よって年齢階層別データが必要であるなどである。そして、授業中、学生から提出されたデータを利用して講師が授業内でライフプランを作成していく。表計算ソフトがはじめての学生が多いことからファイルの開き方から保存・入力方法、計算式の設定・グラフの作成方法まで丁寧に教えるため時間がかかったが多くの学生が初級レベルに達したと思う。収入から支出を差し引きマイナスが引き続き貯蓄がマイナスとなった時点で家計は崩壊しプラン変更となる。実際に販売されている新築マンションと賃貸との比較、そこには金利計算と複利効果が学べる。実際に住宅ローン返済との兼ね合いで意思決定していくことになる。

子育ての人数も支出に大きく関係する。職業選択による年収差など大きな分岐点があることを実感できたと思う。

表計算ソフトでライフプランを作成しているのでシミュレーションが可能である。夫婦共働きをして収入を増やしてはどうか、その場合、社会保険上の扶養には、106万円と130万円問題が存在する。非正規雇用問題、男女賃金差問題が社会課題として議論できる。近年の熟年離婚の増加から新たな女性の貧困問題につながる。シングルマザーだけでなく、一人高齢世帯の増加である。実は老後2000万円問題はその一端でしかない。さらに住宅ローン、生命保険、自動車保険、損害保険、資産運用などの金融商品の仕組みをライフプラン上に取り込み解説していった。成績評価課題として自身の将来のライフプランを表計算ソフトで作成しその問題点と課題のレポートを課した。

## (2) 共通教育スタンダード「d 市民としての責任感と倫理観」及び「e 地域に関する関心と理解力」の扱い方

ライフプランの技法を学べば収支バランスをとることで金銭面では人生を安全に過ごしていける。その前提には市民としての責任感と倫理観が必要である。サブプライムローンが示すように倫理観にかけた金融商品は長く愛顧されることはない。そして、お金持ちになることが目的ではなく収支のバランスの中でいかに人生を謳歌するかが大切であると理解してもらえたと思う。たとえば、住宅購入で高松市と東京都内のマンション購入比較をすれば収入の違いが生活の幸福に直接つながらないことが理解できる。人生にはさまざまな選択（職業、住宅、結婚、子供、老後）がある。その選択に後悔が生まれないようにさまざまな選択肢があることを成人年齢に達した18歳の時に知ることの意義は大きい。

## (3) 考察、課題、可能性

授業評価自由記述に「ライフプランを実際にExcelで作ってみてどのようにお金が回って自分が生活できているのかよくわかりました。支出と収入のバランスをきちんと考えて計画的に生活するとともに、人生の限られた時間を有効に使い後悔のない生き方をするようにしたいと思いました。」とあった。生活は支出と収入のバランスの中で安定があることを理解した受講生である。この考え方に立てば、市民とした責任感や倫理に欠如した行いがいかに人生を破壊に導くか、これは会社でも国家でも同様である。

ライフプラン作成にあたって香川県庁・高松市役所職員の公開された給与、有価証券報告書による上場企業の平均給与によって香川県岡山県に本社のある企業の開示された年収を、高松市の中古新築マンション価格、同賃貸価格など地域を意識したモデルのライフプランを作成した。どこでどのような暮らしをするのが自分にとって幸福かを考える授業となったと思う。受講生のライフプランは、個人情報であるため提出させず課題と感想のみのレポートとなった。ライフプランを作成せずレポート提出した学生も存在する可能性があることが今後の課題である。 (文責：三好秀和)

## 2-3. 「地域で活躍する職業人に学ぶ A・B」

### (1) 授業の概要

本授業の目標は、キャリアに関する知識を理解し、ロールモデルの生き方のリアリティに触れることで視野を広げ、自らのキャリアを主体的にデザインできるように支援する、というものである。授業は、具体的に活用できる代表的なキャリア理論を紹介し（第1、第2回）、それを参考にしながら5名のゲスト講師の職業選択や仕事内容、やりがいなどを聞き（第3回～第7回）、最後に自身のキャリアビジョンを他者の前で発表する（第8回）、という内容である。

ゲスト回の授業は、①ゲスト講話 50分程度、②10分程度のグループディスカッション、③質疑応答、④OPPAの記入という構成である。講師は学生の進路に関係の深い業界から招聘した。各回の振り返りにOPPA(One Page Portfolio Assessment)を援用したOPPシートを使用した。OPPAは、学修者の自己評価を記録するもので、学習の前・中・後における学生の実態を把握するとともに、授業評価、改善を図るために有効なツールである。受講人数は「地域で活躍する職業人に学ぶA」が177名、「地域で活躍する職業人に学ぶB」が37名であったが、あらかじめ座席とグループを決め、ディスカッションと発表はそのグループで行う形をとった。提出物は、OPPAの毎回提出、ゲスト講師2名分の振り返りシート(1000文字程度)の提出を設定した。また、最終回には各自が作成したパワーポイントの資料をもとに個人発表し、資料をMoodleから提出した。シラバスに記載された「授業計画」は、表4の通りである。

表4 授業の構成

|     | 地域で活躍する職業人に学ぶ A         | 地域で活躍する職業人に学ぶ B |
|-----|-------------------------|-----------------|
| 第1回 | オリエンテーション・市民としての責任感と倫理観 |                 |
| 第2回 | キャリアとキャリア形成             |                 |
| 第3回 | 四国新幹線整備促進期成会 (JR 四国)    | 株式会社百十四銀行       |
| 第4回 | 株式会社フソウ四国本社             | 株式会社マキタ         |
| 第5回 | 香川県小豆保健所                | 香川県教育委員会        |
| 第6回 | 帝國製薬株式会社                | 香川労働局           |
| 第7回 | 高松市役所                   | 香川県警察本部         |
| 第8回 | 個人のキャリアデザインを発表、全体の総括    |                 |

### (2) 共通教育スタンダード「d 市民としての責任感と倫理観」及び「e 地域に関する関心と理解力」の扱い方

本授業は、香川県と香川大学が連携して2015年度に開設・開講された。開設趣旨は、初年次学生に対する就労意識の醸成をはかるとともに、県内の企業等への関心と認知を高め、県内就職者拡大につなげるのが主たるねらいであった。2021年度に連携が終了した後も、香川大学のキャリア科目として継続している。昨年度までは「主題 A」の枠で開講

しており、ここに指定されていた共通教育スタンダードは「d 市民としての責任感と倫理観」であった。昨年度までの授業では、大学生としての責任と倫理観として、問題提起と本学の規則を知るという情報提供と振り返りを記述する方法で「d 市民としての責任感と倫理観」を取り扱っていた。本年度から「e 地域に関する関心と理解力」というスタンダードに準拠する必要が新たに生じたため、「e 地域に関する関心と理解力」を、授業内で職業人から幅広い知識を得る内容であるため「b 知識・理解（広範な人文・社会・自然に関する知識）」の表記を加えた。共通教育スタンダード「d 市民としての責任感と倫理観」は昨年度と同様な手法で実施したが、「b 知識・理解（広範な人文・社会・自然に関する知識）」「e 地域に関する関心と理解力」についても、継続して実施してきた開設の趣旨に当てはまるものであったため、問題はなかった。

### (3) 考察、課題、可能性

本授業シラバスの「到達目標」には、「社会において自己が果たすべき役割や市民としての責任ある行動について理解を深め、自己や社会の未来について考えることができる。（共通スタンダードの「d 市民としての責任感と倫理観」に対応）」、「自己のキャリア形成に役立つ基礎知識を理解するとともに、具体的な行動へつなげることができる。」、「地域社会を支える仕事や人について、具体的に説明できる。」（共通スタンダードの「e 地域に関する関心と理解力」に対応）」、「現時点における自分の人生のイメージを言葉にして表すことができる。」と記載されている。「d 市民としての責任感と倫理観」については、初回に「規範意識の必要性と重要性」について担当教員から講義をしている。また、各ゲスト講師の講話からも、社会人としての規範や帰属意識などに気づきを得られたと思われる内容が学生の OPPA に記述されており、授業担当者の意図する範疇を超えて学生が何かを学び取っていることが分かる。

また、本講義の開設趣旨である、「初年次学生に対する就労意識の醸成をはかるとともに、県内の企業等への関心と認知を高め、県内就職者拡大につなげること」は、「e 地域に関する関心と理解力」の発展形であると考えられる。OPPA の内容には、「地元で活躍している企業があることを知らなかったので、他の企業についても調べてみようと思った。」などという趣旨の記述が散見され、学生がゲスト講話により視野を広げるとともに、地域で働く選択肢を考える機会を作ることができたのではないかと考えている。最終日は、講師の話を踏まえて自身の今後の学生生活をデザインし発表したが、地域への関心と理解というより自身のキャリアビジョンを明確化できた効果が大きかった。地域理解の効果を期待するのであれば、課題を再考する必要もあろうかと考える。今後の課題としては、学生に授業内容の理解を促すために、シラバスの内容の表記を授業内容を理解しやすいものへ修正することも必要である。

(文責：原 瑞穂)

## 2-4. 「キャリアデザインと自己理解」

### (1) 授業の概要

本授業は、キャリアに関する基礎知識を理解し、視野や見識の広がりによって選択肢を広げ、学生が主体的にキャリアデザインに取り組むためのスキルの習得を目的とした。授業は、主なキャリア理論に従い、キャリア形成のプロセスを理解するとともに自己理解のためのワーク等を通して「自分は何がやりたいのか」、「自分には何が向いているのか」を考え、自分の経験や興味関心などをもとに職業適性への考察を深める内容である。各回の振り返りに OPPA (One Page Portfolio Assessment) を援用した OPP シートを使用した。OPPA は学習の前中後における学生の実態把握とともに、授業改善に有効なツールである。

授業は、前半にキャリアデザインに必要な「自己イメージの明確化」を目指し、まず、自身の職業興味・価値観の理解を深め、過去の体験を振り返りながら出来ることや強みを理解し、現時点における基礎力を自己評価する。そして、卒業までになりたい自分をイメージした上で向上させたい基礎力を考え、今後の学生生活の過ごし方を考え、プレゼンテーションできるまでを設定した。ゲスト回の授業は、①ゲスト講話 50分程度、②10分程度のグループディスカッション、③質疑応答、④OPPAの記入という構成である。講師には、ご自身の学生時代の経験や就職先を選ぶ軸、就職後の働きかたややりがいなどについてお話いただいた。

受講人数は100名であったが、あらかじめ座席とグループを決め、ディスカッションと発表はそのグループで行う形をとった。提出物は、OPPAの毎回提出、ゲスト講師の振り返りシート(1000文字程度)の提出を設定した。また、7回目には各自が作成したパワーポイントの資料をもとに個人発表し、資料をMoodleから提出した。シラバスに記載された「授業計画」は、表5の通りである。

表5 授業の構成

|     |                         |
|-----|-------------------------|
| 第1回 | オリエンテーション・市民としての責任感と倫理観 |
| 第2回 | 自己理解(職業興味・価値観)          |
| 第3回 | 自己理解(体験を振り返る)           |
| 第4回 | 自己理解(基礎力、目標設定)          |
| 第5回 | ゲスト: 味の素(株)「私のキャリア形成」   |
| 第6回 | 自己理解(職務適性を考える)          |
| 第7回 | 今後の学生生活の目標(発表)          |
| 第8回 | まとめ                     |

### (2) 共通教育スタンダード「d 市民としての責任感と倫理観」及び「e 地域に関する関心と理解力」の扱い方

本授業は、主なキャリア理論に従い、自分の経験や興味関心などによって「自分は何がやりたいのか」、「自分には何が向いているのか」考えることによって、職業適性への考察

を深めるという内容である。昨年度までは「主題 A」の枠で開講しており、ここに指定されていた共通教育スタンダードは「d 市民としての責任感と倫理観」であった。昨年度までの授業では、大学生としての責任と倫理観として、問題提起と本学の規則を知るという情報提供と振り返りを記述する方法で「d 市民としての責任感と倫理観」を取り扱っていた。本年度から「e 地域に関する関心と理解力」というスタンダードに準拠する必要が新たに生じたため「e 地域に関する関心と理解力」を加え、各回で自身の課題解決について考え言語化する内容であるため「a 言語運用能力（課題解決のための汎用的スキル）」を加えた。共通教育スタンダード「d 市民としての責任感と倫理観」は昨年度と同様な手法で実施した。「e 地域に関する関心と理解力」「a 言語運用能力（課題解決のための汎用的スキル）」は、地域出身者の講師の話を参考にして自身の生き方を言語化することで、自分らしいキャリアを考えさせることができた。

### (3) 考察、課題、可能性

本授業の到達目標はシラバスに「社会において自己が果たすべき役割や市民としての責任ある行動について理解を深め、自己や社会の未来について考えることができる。（共通スタンダードの「d 市民としての責任感と倫理観」に対応）」、「キャリアにおける自己の興味・適性・能力を認識し、各々の項目を増やしていける。」、「自らの気づきや感情を言語化したうえで、自己のキャリアデザインに反映することができる。（「課題解決のための汎用的スキル」に対応）」と記載されている。「d 市民としての責任感と倫理観」については、初回に「規範意識の必要性と重要性」について担当教員から講義している。また、社会人としての規範や帰属意識などに気づきが得られたと思われる内容が学生の OPPA に記述されており、学生が社会規範の重要性を学び取っていることが分かる。また、本授業の目的である「自分の興味関心を理解し職業適性への考察を深める」は、自己理解の深まりが自己肯定と積極的な将来展望につながり、身近な地域の産業を含めた具体的な職業探索行動に繋がるため、「e 地域に関する関心と理解力」への橋渡しとして有効に機能していると考ええる。

学生は、キャリアに関する知識を得、自身の職業興味や価値観を知ることによって、キャリア選択の軸をより明確にし、長期的かつ戦略的な取り組みが可能となるスキルの獲得に寄与できたと考える。また、自身のキャリア形成について理解を深めることによって、より明確に学生生活への意欲や課題を言語化できるようになり、これは、「a 言語運用能力（課題解決のための汎用的スキル）」が習得されたものと考えられる。7回目は、授業内容を踏まえて今後の学生生活の送り方を発表した。自身のなりたいキャリアイメージに近づけるためにどのように学生生活を送るかを考える機会となったのではないかと考えている。職業適性とシラバスに記述したが、8回の講義では、自身の職業適性を深く理解することは難しい。ここではキャリアデザインの1段階としての自己理解に集中した内容にすることがより妥当であると考えられる。

(文責：原 瑞穂)

## 2-5. 「人生 100 年時代の学びと仕事を考える」

### (1) 授業の概要

本授業は、2022（令和 4）年度から新規に開講された科目である。具体的には、「人生 100 時代を見据え、自分自身の人生とキャリアを考えるきっかけとするために、『仕事・職業』『キャリア』『進路・就職』『学びなおし』の主な実態やそれらに関連する問題を理解し、目的意識を持ちながら今後のキャリアデザインを主体的に行うための知識を身につける」ことを目的とした。表 6 の通り、本授業の構成は、令和時代の「日本型学校教育」の概要紹介から始まり、近年における大学教育の動向と特徴を説明した。次に、就職活動、新卒採用、転職等の基本的な実態を概観し、日本社会における家族、教育、仕事の関係をめぐってグループに分かれてディスカッションする時間を多く設けた。また、各回の終了時には、授業で扱った、あるいは、受講生どうしでディスカッションした内容等をもとに「振り返りシート」を書いてもらうことを繰り返した。これらの「振り返りシート」の内容は、次の授業冒頭で教員が代表的な「振り返りシート」を選択し、紹介してきた。これにより、教員からのフィードバックが行えることに加えて、受講生にとっても他の受講生が授業を受けて考えたことを知ることができる機会となるため、積極的にリフレクションの方法を取り入れることを意識して実施することを心がけた。

表 6 「人生 100 年時代の学びと仕事を考える」の「授業計画」と実施概要

|       |                       |
|-------|-----------------------|
| 第 1 回 | オリエンテーション             |
| 第 2 回 | 人生 100 年時代と令和の日本型学校教育 |
| 第 3 回 | 大学教育の動向と特徴            |
| 第 4 回 | 学部から新卒、転職             |
| 第 5 回 | これからの仕事と職業、地域社会       |
| 第 6 回 | 令和における大学院教育とキャリアデザイン  |
| 第 7 回 | 学びなおしとリカレント教育         |
| 第 8 回 | まとめ 一市民として新たな学びの時代へ   |

### (2) 共通教育スタンダード「d 市民としての責任感と倫理観」及び「e 地域に関する関心と理解力」の扱い方

人生 100 年時代と言われる今日、地域社会、日本社会、そして、国際社会においても「学び」と「仕事」、家族のあり方が大きく変化している（e.g., リンダ・グラットン & アン・ドリュー・スコット、2016；内閣府男女共同参画局編、2022、96-98 頁）。本授業の少ない受講生が、本学を卒業後に一度就職してから学びなおすことが必要となり、また、転職や新たなキャリアデザインが求められる可能性が想定される。

そこで、共通教育スタンダード「d 市民としての責任感と倫理観」については、本シラバスの「到達目標」には「これからの大学での学びを再考するきっかけを見つけるとともに、自分自身のライフデザインについて具体的に見つめなおし、討議できる（共通教育スタン

ダードの「d 市民としての責任感と倫理観」に対応。）」と記載した。第3週の「大学教育の動向と特徴」、第4週の「学部から新卒、転職」の講義では、本学に限らず国内外の大学で推進されているSTEAM教育や就職活動等の事例を解説し、それらをもとに受講生どうしでグループ・ディスカッションする機会を積極的に設けた。これにより、受講生が自らの「学び」とその後の「仕事」等について相対化することが可能となり、「責任感と倫理観」を持った「市民」として学生（受講生）として学んでいくきっかけになったと考える。

次に、共通教育スタンダード「e 地域に関する関心と理解力」については、前述と同様に「到達目標」には、『仕事・職業』『キャリア』『進路・就職』『学びなおし』をめぐる地域に関する興味関心について、これまで自分が何を考えてきたのかを振り返ることで、必要な学問的基礎を身に付けることができる（共通教育スタンダードの「e 地域に関する関心と理解力」に対応。）」と明記した。これについては、特に第5週以降のグループ・ディスカッションを通じて、受講生どうしで身近な地域でのトピックやテーマを設定し、具体的問題や課題を整理し、どのようにしていこうと考えるのか、その理由や具体的アイデアを含めて検討する時間を作った。そして、グループ・ディスカッションで話し合われた内容は、可能な限りで代表の受講生に共有してもらいながら、教員からもその内容に対してコメントを付すように意識した。実際に話し合われた内容の中には、当初教員が想定していなかった育休や保育等の子育て問題、高齢社会における介護問題、医療費の問題、退職後の過ごし方の多様化等と言った地域社会に強く関わる多種多様なテーマが含まれていた。本授業に限らず、ライフデザインの科目に共通するであろう、扱われるテーマの広範さを象徴するものと考えている。

### (3) 考察、課題、可能性

第1回のオリエンテーション時に「地域で生活する市民としてよりよく生きるための倫理観や責任感を身につける」（香川大学、2022b、5頁）科目として、「人生100年時代」の「学び」と「仕事」を考えていくことを受講生に説明した。第2回以降も、共通教育スタンダード「d 市民としての責任感と倫理観」及び「e 地域に関する関心と理解力」を意識しながら、「振り返りシート」を中心に受講生の関心や質問等にも丁寧に対応することを試みた。

一方で、今後の授業運営にかかる課題も確認できた。それは、各週で上記2つの共通教育スタンダードを網羅的に意識した授業を行うのか、それとも、どちらかにより重点を置いた授業を行うのか、といった授業計画とその柔軟な運用にかかる点である。先述の通り、本授業ではグループ・ディスカッションを頻繁に行っているが、受講生によるディスカッションの内容によっては、いずれの共通教育スタンダードにも対応し得る授業運営が可能かもしれないと考えるからである。この点は、引き続き、検討していきたい。

（文責：蝶 慎一）

## 2-6. 「映像から学ぶ香川の歴史と文化、地域の課題」

## (1) 授業の概要

本授業は、今年度より新規に開講された、香川に関わる映像資料を基礎教材とした地域理解に資する授業である。平成 29 (2017) 年度から令和 3 (2021) 年度まで、主題 C 基礎科目として開講されていた「地域と香川大学」(1 単位必修 e ラーニング科目) の動画コンテンツの一部を用い、反転授業として再編成した。反転授業とは、「従来教室の中でおこなわれていた授業学習と、演習や課題など宿題として課される授業外学習とを入れ替えた教授学習の様式」(溝上、2017、1 頁) のことを指す。シラバスに記載された「授業計画」は、表 7 の通りである。

表 7 「映像から学ぶ香川の歴史と文化、地域の課題」の「授業計画」

|       |  |
|-------|--|
| 第 1 回 | オリエンテーション、グループ分け、アイスブレイキング、教材の配布。                                    |
| 第 2 回 | 情報整理の方法、レポートの書き方、プレゼンテーションの方法についてグループ学修。                             |
| 第 3 回 | 映像資料①「近・現代史における香川の政治家群像」(武重雅文・名誉教授) を題材とするレポート発表、グループワーク、プレゼンテーション。  |
| 第 4 回 | 映像資料②「香川県の地域活性化プロジェクト」(西成典久・教授) を題材とするレポート発表、グループワーク、プレゼンテーション。      |
| 第 5 回 | 映像資料③「観音寺市 PR 助手とまこインタビュー」(岡田徹太郎・教授) を題材とするレポート発表、グループワーク、プレゼンテーション。 |
| 第 6 回 | 映像資料④「香川県の里海づくり」(末永慶寛・教授) を題材とするレポート発表、グループワーク、プレゼンテーション。            |
| 第 7 回 | 映像資料⑤「高松市の公共交通政策」(紀伊雅敦・教授) を題材とするレポート発表、グループワーク、プレゼンテーション。           |
| 第 8 回 | 全授業を通じた総括グループワークと総括プレゼンテーション。チェックアウト。                                |

## (2) 共通教育スタンダード「d 市民としての責任感と倫理観」及び「e 地域に関する関心と理解力」の扱い方

先述の通り、本授業は、主題 C 基礎科目「地域と香川大学」の動画コンテンツの一部を用いた反転授業である。そのため、共通教育スタンダード「e 地域に関する関心と理解力」は、最初から、動画コンテンツの中で扱われていた。本授業シラバスの「到達目標」にも、「香川の歴史と文化、地域の課題について説明できる。(共通教育スタンダードの「地域に関する関心と理解力」に対応)」と記載した。

一方、共通教育スタンダード「d 市民としての責任感と倫理観」については、本授業にどのように位置づけるか新たに検討が求められた。授業担当者間での検討を経て、シラバスの「到達目標」には、「人びとの取り組みへの理解を得て、自らのキャリアについて、いくつかの候補を挙げるができる。(共通教育スタンダードの「市民としての責任感と倫

理感」に対応)」と記載した。これは、特に、第4週、第5週の動画コンテンツ（映像資料②と③）を意識したものであり、例えば、公務員以外にも地域活性化や地方創生とかかわる多様なキャリアをイメージできるようになることを受講生に求めたものである。

しかし、実際に授業を担当してみると、共通教育スタンダード「d 市民としての責任感と倫理観」は、当初想定していたよりも幅広い範囲で本授業に関わっていたことが明らかになった。例えば、第6週の里海づくり（映像資料④）、第7週の公共交通政策（映像資料⑤）については、大学生の立場で、あるいは一市民としてどのようにこの問題に取り組むことができるのか、グループワークで検討が行われた。

ちなみに、このグループワークのお題は、受講生が自ら提案し、グループごとに選択したものである。これはまさしく、「社会において自己が果たすべき役割や、市民としての責任ある行動について理解を深め、そこから自己や社会の未来について考えることができる」という、「d 市民としての責任感と倫理観」の全学共通教育の到達基準として記載された内容に該当する。

こうした受講生の態度は、他の週でも確認することができた。与えられた課題を、大学生として、あるいは一市民としての「自分」に引き付ける受講生の取り組みをみると、ほぼすべての回で、二つの共通教育スタンダードを扱うことが可能となると考えられる。

### (3) 考察、課題、可能性

本授業シラバスの「到達目標」には、「香川の歴史と文化、地域の課題について説明できる。（共通教育スタンダードの「地域に関する関心と理解力」に対応）」、「人びとの取り組みへの理解を得て、自らのキャリアについて、いくつかの候補を挙げるができる。（共通教育スタンダードの「市民としての責任感と倫理観」に対応）」と記載されている。

しかし、実際には、それらの想定を超えた幅広い範囲で、本授業が二つの共通教育スタンダードに関わっていたことが明らかになった。二つの共通教育スタンダードを有機的に組み合わせるため、授業の冒頭で、各回の内容が共通教育スタンダードのどの部分にどのように関わっているのか、繰り返し説明したことが功を奏したとも考えられる。受講生が授業後に提出する「振り返りレポート」には、授業で何を学んだかを確認するサマリー、その授業で何を考え感じたかを記述するレスポンスが記されており、それらを見る限り、授業担当者の意図が受講生に的確に伝わったように見える。

これらの課題と可能性について述べれば、①さらなる理解を促すために、「到達目標」をはじめとしたシラバス記載内容を、学修の姿勢や内容をイメージしやすいものへ修正することも求められる。さらに、②こうした事前学修に映像資料を用いる工夫は、当然にも他の授業でも応用しうるものであり、その一般的な通用性を検証する必要もあろう。この点については、別稿に譲りたい。

（文責：岡田徹太郎・西本佳代）

## 2-7. 「地域をデザインする思考と実践」

### (1) 授業の概要

地域の活性化やまちづくり、観光・産業振興といったテーマは、一部の学部で対応する課題ではなく、全学部が総合的に対応していくべき課題群である。本講義では、まずそうした理解にたったうえで、持続可能な地域づくりに関わろうと考えている学生に向けて、どうすれば地域の課題解決に向けた取り組みを具現化（デザイン）することができるか、その考え方（思考）と実現方法（実践）について様々な事例をもとに講義を進めていく内容となっている。講義の全体構成は以下のとおりである。

表8 授業の構成

|     |  |
|-----|--|
| 第1回 | イントロダクション 地域のミライを構想する<br>イタリア中小都市マテーラとの比較、地域の豊かさとは               |
| 第2回 | 地域とどう関わるか 地域と対話し実践する私たちの挑戦<br>屋島山上ちょうちんカフェの取り組み、学生プロジェクト紹介       |
| 第3回 | 地域をデザインする思考法 (1) まちづくりのプランニング<br>地方創生☆政策アイデアコンテストで大臣賞をとった話       |
| 第4回 | 地域をデザインする思考法 (2) 問題解決思考<br>問題解決思考・ゼロベース思考・ロジックツリー                |
| 第5回 | 地域をデザインする思考法 (3) 論理的思考からアイデア思考へ<br>課題を融合する問題解決思考に向けて             |
| 第6回 | 地域をデザインする実践法 (1) 持続可能なコミュニティデザイン<br>つながりの場をつくる五郷里づくりの会           |
| 第7回 | 地域をデザインする実践法 (2) プロジェクトの起こし方<br>will・can・must 企画3円、アイデア思考ワークショップ |
| 第8回 | まとめ アイデア思考による学生提案コンテスト   |

### (2) 共通教育スタンダード「d 市民としての責任感と倫理観」及び「e 地域に関する関心と理解力」の扱い方

「d 市民としての責任感と倫理観」に関して、本講義のテーマとなる「持続可能な地域づくり」において中核となる教育目標といえる。持続可能な地域づくりを意識的かつ主体的に進めていくためには、自分一人で全てを成し遂げることは難しく、その地域と深い関りを持つ他者との協力関係を築き、「一人の百歩より百人の一步」が生み出される状況を意識的につくり出していく必要がある。そのためには、市民もしくはある地域課題に影響を受ける人々が、他者あるいは行政セクターにその責任を委ねることなく、広く共有されるべき課題として認識を変えていく必要がある。それは、例えば二酸化炭素の排出削減や資源リサイクルといった地球規模の環境問題に対しても必要な責任感と倫理観といえる。

「e 地域に関する関心と理解力」に関しては、本講義を通じて、全ての講義回で通底している教育目標である。現在、地域の衰退や持続性への懸念が社会問題となって久しい状況にある。人口が増加する規模拡大社会から人口が減少する規模縮小社会へと移行するなか

で、日本の地方では、地域経済、自然、環境、医療、食、文化、コミュニティなど、連関する分野で様々な課題が表出している。本講義では、こうした日本の地域をめぐる課題や現状を理解したうえで、地域との対話と実践を通じて課題解決を図る立場から、その思考と実践に関する基礎的な知識や考え方を習得することを学習目標としている。本講義を通じて、現実の地域課題を自身の関心から捉え直し、そうした課題に対して実践的に対応しようとする学生を増やしてくことも、本講義を実施する1つの目的となっている。

### (3) 考察、課題、可能性

本講義はこれまでに2回(2年)実施してきたが、筆者が所属する経済学部のみならず、教育、法、農、工、医、全ての学部の学生が履修しており、入学したばかりの1年生が学部の垣根を超えて地域課題について話し合い、アイデア思考を通して学生発表をする等、他学部の学生同士でとても良い影響を与え合っていると感じている。特に、印象に残っているのは農学部の学生で、地域課題に対して強い問題意識と解決に向けたビジョンを持って講義を履修する学生が1人ではなく複数人毎年受講している点である。もちろん他の学部でも目立って興味関心の強い学生が一定数おり、そうした学生たちが全体の雰囲気引っ張ってくれているのがとても頼もしい限りである。本講義では、可能な限りグループワーク、ディスカッション等の時間をとって進めているが、やる気のある学生たちがやりがいを感じながら講義が受講できるよう、担当教員との対話時間も十分とりながら講義を進めていきたい。

今後の展望としては、地域課題の解決に強い関心を持って入学してくる学生たちのつながりの場づくりとして本講義が活用できればと考えている。また、1年前期第1Qに形成された学生同士のつながりにより、その後の大学生活で新たな活動機会が増えていけば、なお一層本講義の開講意義がでてくる。現段階ではそこまで担えていないと考えているため、今後の講義担当者にとっての講義目標として、そうした場づくりを目指していきたい。

(文責：西成典久)

### 3. おわりにー考察と課題

本章では、「全学共通教育新カリキュラムの完全実施」(香川大学、n. d. b)となる初年度(2022(令和4)年度)における「ライフデザイン」の全体的な実施状況を整理してきた。まず、「ライフデザイン」という構成科目群の位置づけとその特徴、開講状況を概説した後(1.)、「人生とキャリア」と「地域と生きる」の両構成科目群より7つの科目(表1参照)における詳細な実施報告を詳しく述べてきた(2.)。

以上を踏まえ、あらためて「ライフデザイン」の理念である2つの共通教育スタンダード(『d 市民としての責任感と倫理観』及び『e 地域に関する関心と理解力』)の扱い方(扱われ方)に着目し、2点考察する。

第1に、担当教員が2つの共通教育スタンダードの「関係性」(寺尾ほか、2022、16頁)を担当授業で具現化する際の実践上の課題が析出されている点である<sup>1)</sup>。繰り返しになるが、今回が「全学共通教育新カリキュラム」がスタートした初年度であり、今後、いかにして個々の授業レベルで2つの共通教育スタンダードを適当に扱っていけるのか、継続的な検討が待たれる。第2に、同じ「ライフデザイン」の構成科目群、さらに言えば、同じ「人生とキャリア」や「地域と生きる」の構成科目群内の授業科目であったとしても、2つの共通教育スタンダードの扱われ方は、実に多様である点が挙げられる。これは、令和5年度以降も「ライフデザイン」という構成科目群が有する「学びの動機付け・方向づけを促す」(寺尾ほか、2022、13頁)大きな可能性を示唆するものと考えられる。

以上、本章に掲載した貴重な実施報告等については、「ライフデザイン実施部会・担当者会議」(香川大学、n. d. c)等を通じて現行の担当教員はもとより、令和5年度以降に「ライフデザイン」を担当いただく教員にも共有しながら、引き続き、改善の契機としていきたい。

(文責：蝶 慎一)

#### 注

- 1) 2つの共通教育スタンダード(『d 市民としての責任感と倫理観』及び『e 地域に関する関心と理解力』)の扱い方について、寺尾ほか(2022)では、「授業担当者に説明する段階になって、それらの関係性が再度問われた」(16頁)と言及されている。この点に関して、「ライフデザイン」が新規開講した2022年度においても、この「関係性」(16頁)は、引き続き、検討されるべき課題と考えられる。

#### 参考文献

- 香川大学(2022a)『全学共通科目 開講科目表及び時間割 2022年度』香川大学。  
 香川大学(2022b)『全学共通科目修学案内(教養教育)2022年度』香川大学。  
 香川大学(n. d. a)「全学共通教育の方針・ポリシー」(<https://www.kagawa-u.ac.jp/>)

- information/outline/ideal\_3policy/18833/) < 2022 年 11 月 14 日アクセス >
- 香川大学 (n. d. b) 「香川大学における教養教育改革」 (<https://www.kagawa-u.ac.jp/high-edu/teachers/reform/class/>) < 2022 年 11 月 14 日アクセス >
- 香川大学 (n. d. c) 「大学教育基盤センター組織図 (2022 年 4 月 1 日現在)」 (<https://www.kagawa-u.ac.jp/files/9616/4871/4062/2022.4.1.pdf>) < 2022 年 11 月 14 日アクセス >
- 溝上慎一 (2017) 「アクティブラーニング型授業としての反転授業」 森朋子・溝上慎一編『アクティブラーニング型授業としての反転授業』ナカニシヤ出版、1-15 頁。
- 内閣府男女共同参画局編 (2022) 「特集 人生 100 年時代における結婚と家族～家族の姿の変化と課題にどう向き合うか～」『男女共同参画白書 (令和 4 年版)』勝美印刷株式会社、3-108 頁、([https://www.gender.go.jp/about\\_danjo/whitepaper/r04/zentai/pdf/r04\\_tokusyu.pdf](https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r04/zentai/pdf/r04_tokusyu.pdf)) < 2022 年 11 月 24 日アクセス >。
- リンダ・グラットン & アンドリュー・スコット (2016) 『LIFE (ライフ) SHIFT (・シフト) 100 年時代の人生戦略』東洋経済新報社。
- 寺尾徹・葛城浩一・佐藤慶太・西本佳代・岡田徹太郎・三宅岳史・徳田雅明・高水徹・高橋明郎・宮崎英一・野村美加 (2022) 「新カリキュラムの始動へ向けた取り組み」『香川大学教育研究』、第 19 号、13-31 頁。